

## 原因と結果を結びつける「デ」「ニ」 —格助詞 {デ/ニ} 交替から見る日本語の視点—

鈴木梓

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 D3

azusa-27@hotmail.co.jp

### 1. はじめに

本研究では、原因として名詞をマークし結果となる動詞に結びつけるという機能において格助詞のデとニが交替しうる現象に注目し、格助詞「デ」「ニ」について考察する。

#### 1.1 本研究における「原因」と「結果」

- 1) 健康診断 {デ/ニ} ひっかかる
- 2) 病 {デ/ニ} 倒れる
- 3) 検査 {<sup>?</sup>デ/ニ} 通院する
- 4) 事故 {デ/\*ニ} 入院する

1) から 4) はいずれも「名詞 {デ/ニ} 動詞」の形をとっており名詞が動詞を引き起こしたという点で「原因 {デ/ニ} 結果」と理解できる。しかし 1) および 2) では {デ/ニ} 両方が使用できるのに対し、3) ではデがやや不自然となり、4) ではニが不自然となる。語順という点でも名詞と動詞の関係という点でも同じであるのに、{デ/ニ} 交替が自由なものとは不可能なものがあるのはなぜだろうか。

本研究では、便宜的に 1) から 4) のような文で、動詞を引き起こす要素となった名詞を「原因」、動詞を「結果」と呼び、{デ/ニ} 交替の自由度の度合いから日本語における原因格について再考することを目的とする。

#### 1.2 日本語の格

日本語においては、格文法の初期段階が英語の格文法（意味役割、 $\theta$  役割などの定義も含め）に当て嵌める形で始まったため、そもそも膠着語であり性質が異なる日本語では不具合も多いことを指摘した研究は多い。英語では不変化詞、主に前置詞によって明確に格が表示されるが、日本語では格助詞が名詞に付与する機能が常に同じとは限らない。例えば、「の」が所有であったり（「私の本」）主語であったり（「私の買った本」）場所であったりし（「東京の銀座」）、使用は多岐に渡る。確かに、名詞に文の中での役割を付与し、動詞との関係を示すという機能では意味役割に相当するものが日本語の格助詞にも明らかに存在する。よって Fillmore に代表されるような意味役割を日本語に見出そうとすること、語順や不変化詞によって、極めて明らかに意味役

割が付与される英語を出発点とすることには意味がある。よって本研究では意味役割としての位置づけも考慮した上で、原因を表す名詞に後続し結果を表す動詞に結びつけるデ/ニに注目する。

## 2. 先行文献

先述のように、日本語では英語ほど明確に格、意味役割が付与されない。特に「ニ」の範囲は広く、深層格の規定に際しオーバーラップも多い。深層格として「原因格」を設定すると、「デ」「ニ」は両方とも原因格を示す。この現象について山梨（1993）は以下のように示している。

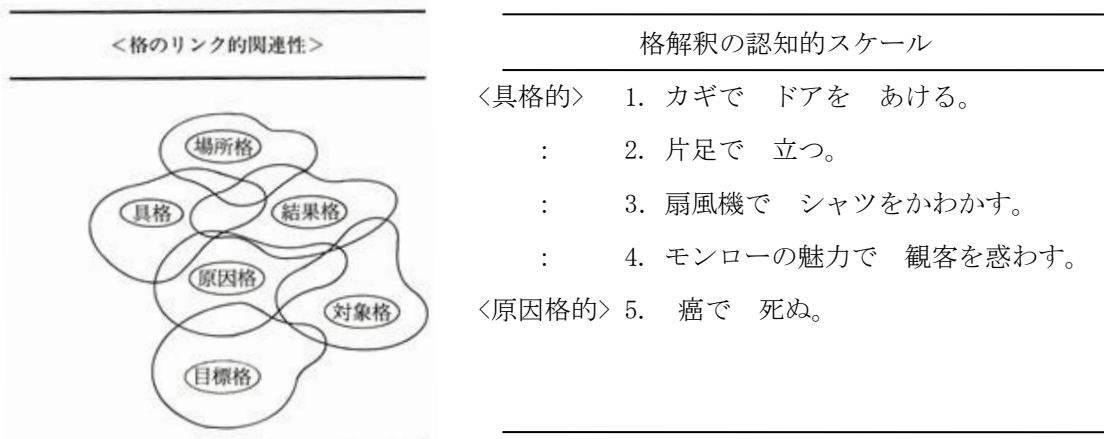


図 1 「格のリンク的関連性」山梨(1993) pp. 48 表 1 「格解釈の認知スケール」山梨(1993) pp. 49

ニはへ、カラ、マデ、ヲとも真理条件的にパラフレーズ可能な場合があり、文脈によって入替可能だと示し、格助詞ニの使用域の広さを指摘している。その上で「癌 {デ/ニ} 倒れる」ではデ/ニ両方が原因を、更に場所格をも示せると言う。<sup>2)</sup>さらに「格とプロトタイプ」として、以下のような特徴を挙げている。プロトタイプでは相補分布をなしていると言えよう。

対象	CONC (具象的か)	ALIEN (離脱可能か)	MANIP (手で操作可能か)	CONTR(コント ロール可能か)	RESP(内在的力 があるか)
具格	+	+	+	+	-
原因格	-	-	-	-	+

表 2 「格とプロトタイプ」山梨(1993) pp. 50-51<表-2>及び<表-3>まとめ<sup>1)</sup>

原因を表す場合でも場所格としての使用が根底にあるという点では神尾(1980)とも共通する。神尾(1980)は「ニ」の領域は「デ」より限定され、「ニ」が、述語句がある空間的位置と必然的に結びついているもしくはある方向への指向性を含む場合に用いられる助詞なのに対し「デ」は選択を経た結果であることを示すと言う。さらに知覚や心理状態を作り出す結果となった刺激そのものや刺激のあり場所を示すこともあり、Vを引き起こす原因を示すことも少なくないと言う(但し下線部は発表者による)。本発表では山梨(1993)及び神尾(1980)に基づき、{デ/ニ}

はどちらも原因を表せるが、その交替には場所格的理解も含めた認知の違いが影響すること、述語との結び付きも影響することを視野に入れつつ考察していくこととする。

## 2. 調査

先行研究で既に、原因を示す場合に格助詞「デ」「ニ」が交代可能な場合があることは指摘されている。しかし交替に際した意味の違いについて明確でない。よって本研究では、交替が可／不可の条件、交替による意味の違いについて考察する。今回は小説5篇から原因と理解できるものを例文として収集した。名詞と動詞の傾向について、図2及び3に示す。

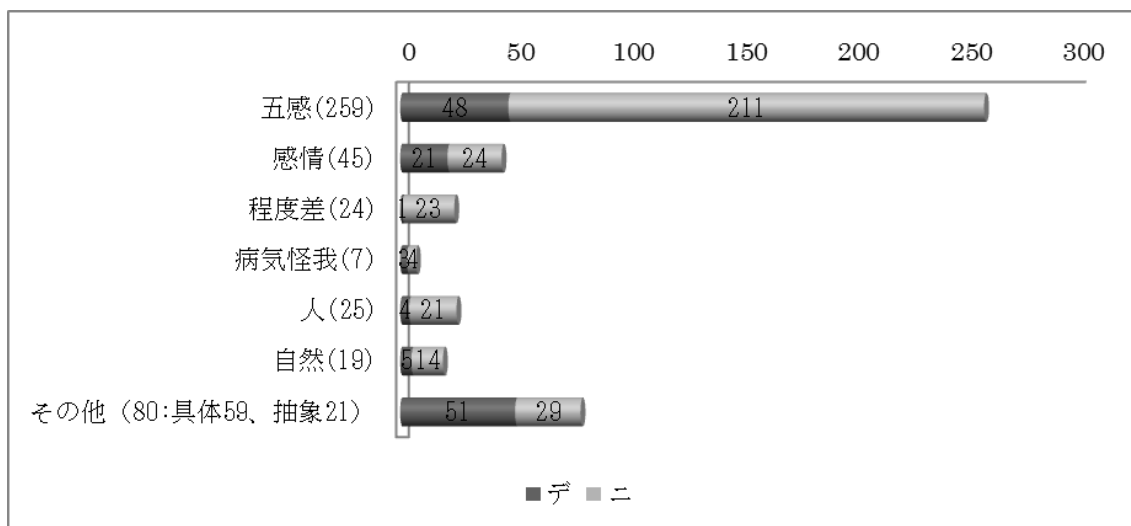


図2 小説5篇による「デ」「ニ」の例 (名詞)

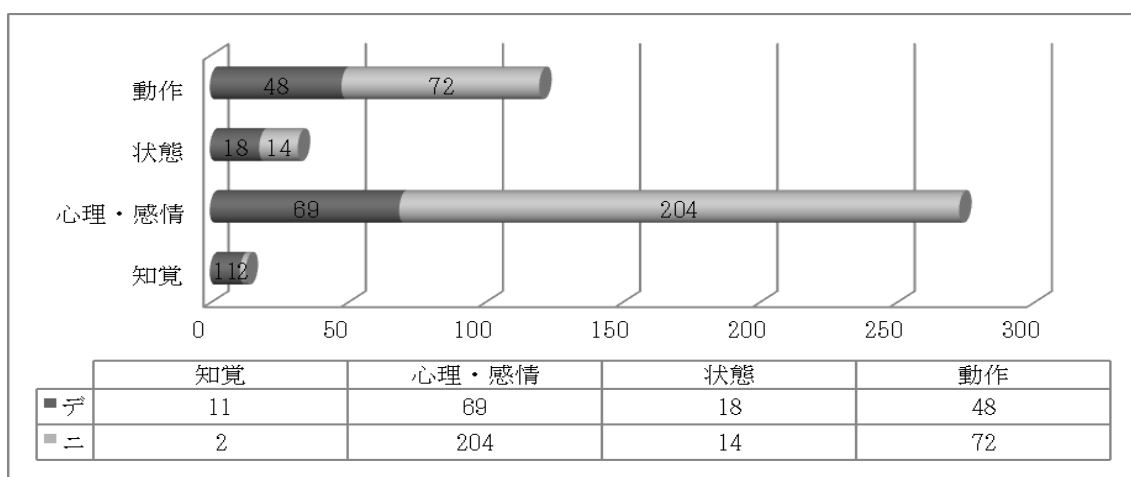


図3 小説5篇による「デ」「ニ」の例 (動詞)

名詞や動詞の解釈について見るため、実験的に小説を対象とした。短文では原因以外の例、「(...) ジーニアスバンクで作られた俺を買ったんだって。」(『麒麟』山田悠介 2003 角川文庫 pp. 176) 等では一見すると「ジーニアスバンク」は場所のようだが、人工授精機関で手段とも「作る」結果の原因とも理解できる。表2の原因格たる各条件にも違反しない。ニとも入替可能であ

り、文脈を配慮しても意味に相違はない。今回はこのようなゆらぎのある例も全て含めた。結果、459例は図2及び3のように大きく分けて名詞は7、動詞は4の傾向を示すことがうかがえた。

### 3. 考察

本研究から原因を表す格助詞「デ」「ニ」について、入替可能な場合があり、名詞にも動詞にも一定の傾向がうかがえた。名詞は山梨(1993)の原因たる条件を満たしており、使用はニの方が目立った。原因の名詞を総体的に捉える場合にニが、部分に注目し具体的な状況要素と捉える場合にデが好まれると思われる。例えば、デ/ニ両方に現れる「声」や「音」でニは内容に注目しない音声の場合、デは「怒鳴り-」「罵-」など修飾要素や前後文脈での補足的説明があり具体的な音声の場合に見られた。多面的・総合的な人などは「ニ」を好むのだろう。対象が総体的・抽象的でも具体的・状況説明的でもある場合、原因を表す格助詞「デ」・「ニ」は入替可能であり、日本語で格助詞が名詞に付与する役割は一定ではないようだ。同じ原因でも「ニ」は動詞の対象に、「デ」は動詞の発生条件に注目するという視点の異なりが「デ」・「ニ」使い分けに影響する。

### 4. 終わりに

本研究から、原因を表す格助詞「デ」「ニ」の選択には名詞と動詞が影響していることが明らかとできた。名詞の傾向は山梨(1993)の各条件に、動詞の傾向は神尾(1980)の指摘に違反しないものであった。しかし山梨(1993)では動詞については指摘されておらず、神尾(1980)も「知覚や心理」と述べるにとどまっている。今後は名詞及び動詞についてさらに調査を進め考察を深めることを課題とし、原因を表す格助詞「デ」「ニ」の選択を足がかりとして日本語における視点について明らかにすることを目標としたい。

### 参考文献

- 神尾昭雄(1980)「特集ことばの空間学『に』と『で』」『月間言語』Vol.9 No.9 大修館書店  
山梨正明「格の複合スキーマモデル—格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」『日本語の格をめぐって』(1993)  
仁田義雄編 pp.39-65 くろしお出版

### 注

- 1) 但し CONC (=Concrete) : 対象が具象的、ALIEN (=Alienable) : [対象が離脱可能]、MANIP (=Manipulable) : [対象が手で操作可能]、CONTR (=Controllable) : [対象をコントロール可能]、RESP (=Responsible) : [対象に内在的な力が存在] を表し、表組は発表者による)  
2) 「女性の権利110番。「家庭」に揺れる私たち。」山梨(1993) pp.45 など